特別企画 いっこく堂さんインタビュー

いつまでたってもあきらめない

いっこく堂と言えば、腹話術でお馴染みの人だ。声は遅れてくるし、人形を何体も使った腹話術や人形を使わない腹話術もある。そんな彼が、腹話術をやろうと思ったのは29歳のときだと言う。諦めずに目の前の夢を追い続ける…苦労や思いを聞いてみた。

夢を持ち続けて

「とにかく夢について伝えたいですね」子どもも大人も、夢をあきらめないでほしい。そんな思いをトークショーで伝えたいと言う。

実際、2月23日に町文化ホールで行われた「いっこく堂トークショー」の最後にいっこく堂さんは「夢はいくつになっても持ち続けて、好きなことを続けていってください」と話した。

3世代に楽しんでもらえる腹話術

熊本県はよく来ているが大津町は、初めてといういっこく堂さん。しかし、大津町に来て、トークショーの準備などをボランティアの人たちが協力しているのをみて、驚いたという。

「僕は、劇団にいたこともあるから、テレビじゃできないこの雰囲気（ホールで皆さんと触れ合うこと）が好きなんです」テレビでは、年代で違うお笑いが多いが、おじいちゃん、おばあちゃん、お父さん、お母さん、子どもの3世代が楽しめるショーができることがいっこく堂さんの誇りだ。

「生きてるだけで、それだけで」

いっこく堂さんは、昨年ある歌をリリースした。「夢で歌ができた。それで、夜中に飛び起きて歌詞を書いたんです。でも、僕は、歌手じゃない」そこで考えた方法が腹話術で歌うことだった。歌詞もとても単純でストレートな表現。それを照れずに、素直に伝える方法は、人形と一緒に歌うことだったのだ。「聞いたお客さんも素直に受け入れてくれます。反応が良いですね」自殺未遂をした人から手紙が来たこともあったという。「生きてるだけで、それだけで」命の大切さを伝える、腹話術士。それが、いっこく堂さんだ。

トークショーに来ることができなかった人たちに…

『やりたいことを、目標を持ってやってください。途中で目標が変わることもあると思います。しかし、それは新たな目標を見つけるための通過点なのです。「挫折」ではないのです。何をやっても無駄なことはありません。でも、今は目の前にある夢に突き進んでください。何をやっても遅いということはありませんから。私が腹話術を始めようと思ったのも、29歳のときでした。やりたいと思ってからは、図書館から腹話術の本を借りて、練習しました。今、夢や目標が無くてもあせらないでください。目の前にあることを毎日ちゃんとやっていくことで夢は見つかります。常にアンテナを張っていれば、きっと』

夢

腹話術で、マ行とパ行、バ行などの破裂音を出すことはとても難しいと言われます。皆さんも唇をつけないで「まみむめも」って言ってみてください。とても、言えないものです。しかし、いっこく堂さんは、29歳から始めた腹話術で、上あごと舌を使って破裂音を出すことができるようになったが、その練習では、口から血がでることもあった。でも、夢があったから続けてこられたのだ。今回のインタビューやトークショーで「笑い」だけではなく、「夢」「命の大切さ」を教えられた気がした。

部制導入

より分かりやすい課の名称に

平成18年度から課の統廃合を行い、課の下に室を設けていましたが、4月から、「課」を「部」に、「室」を「課」にします。住民の皆さんに、より分かりやすい組織と名称に変更します。

町での部制の導入は、隣の菊陽町に次いで、県内で二番目の導入です。現在、大津町は福祉問題や教育問題など、色々なことを菊池郡市（菊池市・合志市・菊陽町・大津町）で話し合いながら、仕事の調整を行っています。大津町以外の市町はすべて部制が導入されています。部制を導入することにより、菊池郡市内での協議が円滑に進むことが期待されます。

また、町の課の統廃合で、横の連携を強化しました。役場などの縦割り行政による弊害が叫ばれてきましたが、いわゆる「たらい回し」にされることも少なくなったと思います。そして、住民の皆さんの要望にすばやく対応するため、少人数による庁議システム（町の施策や方針を決めるシステム）を導入し、より一層の住民サービス向上に努めてきました。

このように、機構改革のメリットは残し、デメリットを改正して、さらに部制の長所を生かすことで、より住民サービスの向上を図っていくことができます。

部制に伴う、職員の役職手当には変更ありません。部長の管理職手当はこれまでの課長の管理職手当と同一、課長の管理職手当はこれまでの室長の管理職手当と同一です。

今後も更なる行政サービスの向上に努めます。皆さんのご理解とご協力をお願いします。